

第110回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2018年10月8日(月) 14時～17時

兼題「硯洗う」「洗硯」

- 川井素山 ○腰たたかれ終る指圧やそぞろ寒
竹垣を漏れ日こぼれる萩の庭
ジョッキの泡飛ばす浜風秋暑し
防空壕へて我の手の硯洗ふ
- 保井寶正 ○洗硯や万葉かなのけそうぶみ
毬栗やラッコのごとく弾け落つ
親指の腹で鯛の旬を聞く
誰にしも隠し事あり秋簾
- 佐久間喬 ○世は無常流るるのみや秋の水
かな文字のなめらか願ひ硯洗ふ
大台風屋根と自転車さらひけり
雨降れど躍るソーラン運動会
- 丸山酔宵子 ○倒木が鳥居を塞ぐ野分あと
湯畑の回廊叩く秋驟雨
端溪の形見の硯洗ふ朝
野分さり夜半の静けさロック呑む
- 菊地崇之 ○枯尾花偉人を騙る私小説
ナオミちゃん硯洗いて快挙果す
紅葉道黄金の足音天を差す
深酒や芸術の秋白川夜船
- 吉田啓悟 ○風に乗り夕陽に溶ける赤とんぼ
桃の実や初恋ひとつ手のひらに
洗硯や切字忘るることもあり
書斎の筆立に挿す秋扇
- 青木英林 ○鈴生りに土の香りや落花生
遠来の客に秘蔵の濁酒
水墨画始めんとして硯洗ふ
いなご
蝗 あり餓鬼に戻りて酒を酌む

山本草風 ○新走り一気に臓腑駆け抜ける
背を伸ばし硯洗ひて経写す
喜寿迎へ趣味三昧の竹の春
嘘はなしスポーツマンの秋の顔

佐久間たか子○掃苔や溜息ひとつ雲いつぺん
跳馬する踏み切り音や秋暑し
秋の田を蒔る少年のジャージかな
体育祭騎馬戦女子のねばり腰

渡辺鯨波 ○洗硯や納戸に古りし水滸伝
洗硯や祖父の遺影のなまず髭
東京は起伏ある町秋時雨
ジェラートを翳して歩く文化の日

原 晶如 ○大楠の匂ひてこほろぎ月夜かな
ぼち袋ととのへ硯洗ひけり
草は穂に化石の森の音鎮む
谷戸の田の斜光明るき稲架日和

後藤克彦 ○高層の窓に泳ぐや翳雲
硯洗ひ自慢の筆で一の文字
半開き傘持ち去る台風日
新蕎麦の会も三日目通になる

永井正孝 ○硯洗ふ墨の匂ひに我浸る
敬老の日展覧会に白頭混む
散歩道いつもの如き金木犀
朝顔の採取袋の色不明

青葉ひかる ○散る椿愛しさに堪え忍ぶ恋
硯洗う友の目光る明日に出す
黄金の稲穂なびいて白い月
銀化の日祝の酒は夕紅葉

次回「萩句会」

日時 2018年11月12（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『白鳥』一句

当季雑詠 三句